

with コロナを考える

弘前医療福祉大学

学長 下 田 肇

新型コロナウイルス感染症は現代文明が元々抱えていた脆弱性を浮き彫りにしたとも言えます。人々や経済活動が国境を越えて往来するグローバリズムにより感染が広がり、そのウイルスによりグローバリズムで動いていた社会活動が止まってしまいました。つまり、過度な市場競争に委ねてきたグローバリズムの医療や経済のもろさが見えてきたことは、これからの世界を考える際に多いに議論されなければならない重要な課題と言えます。

さて、新型コロナウイルス感染症のデルタ株による第5波が収まったかのように見えてきましたが、今年に入りオミクロン株による第6波が急激な勢いで広まってきて、先はまだまだ見通せない現状になった昨今です。この2年間のコロナ禍の中で新しい様式の生活パターンが定着してきており、感染対策は手洗いの励行、マスクの常時使用、三密の実行などが社会生活、日常生活の中にすっかり馴染んできています。そして、リモートワーク、オンライン会議などが当たり前になりました。その一方で友人、知人との対面でのコミュニケーションの機会が少なくなり心さみしい限りで、日常生活における「人とのつながりの大切」を改めて考えさせられることになっております。コロナパンデミック後の社会はどのようなかについては、AIやICTが急速に浸透することで多様な働き方が求められる社会が来ると考えられますが、私たちに「真の幸福をもたらす社会」とはどのような社会を目指せばよいのか、今こそ立ち止まってよくよく考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

本年も教職員の皆様には新型コロナウイルス感染症に気をつけて仕事をしていただき、また本紀要への積極的な投稿をよろしくお願いいたします。